

---

編集された「クレド」の神学——グノーシスとシューベルト——

堀 朋平 (国立音楽大学)

---

本発表は二つの目的をもつ。ウィーンの作曲家フランツ・シューベルト（一七九七～一八二八年）とグノーシス（主義）の接点を指摘すること、その顕著なあらわれを、ラテン語ミサ曲（全六作）の「信仰告白（＝クレド）」楽章に作曲家自身がほどこした歌詞編集のプロセスに探りとることである。

シューベルトは、宗教音楽において宗派を超えた実践をみせ、しばしば自由な宗教観を記した。「神々しい」自然に「おのずと湧き上がる祈り」こそ作曲の契機であると述べる書簡（一八二五年）には、F・シュライアマハーの自由主義的な宗教論（一七九九年）との親近性が読み取れる（Stollberg 2014）。先行研究はこうした傾向を、スピノザを介した「汎神論」の影響によって説明してきたが、〈此岸における神性の充溢〉をことごとく汎神論は一八二〇～二三年頃の創作にしか妥当せず、後年には「裏切られた汎神論(enttäuschter Pantheismus)」（Kohlhäufel 1999）の基調が前景化してくる。これに対し、シューベルトの創作をより広範に説明しうるのがグノーシスの理念であろう。シラーを介して受容されたグノーシス文書『ヘルメス選書』が親友の神学詩人 J・マイアホーファー（一七八七～一八三六年）に愛読されていたという証言から、マイアホーファーの古代歌曲群にグノーシス神話が底流しているとする解釈もある（Shaw 2014; 堀 2018）。神的存在が地上に墮し、痛みと虚無に耐え、天への帰昇を性的含みと共に熱望する、という話型がそのエッセンスをなす。

以上をふまえて「クレド」の歌詞編集に目をむける。この編集が作曲家の意志で漸次的に洗練されていったことは説得的に示されたが（Gingerich 2000）、それがいかなる思想性によるのかについては、「全能 (omnipotens)」神の忌避を汎神論の流行から説明するといった現状にとどまっている。だがそもそも「クレド」の原型となった二～四世紀の諸信条をも考量するならば、シューベルトが忌避した「(死者の)復活 (resurrectio)」や「(父子の)本質共有 (consubstantia)」といった箇所は、グノーシスの排除を大きな動機として練り上げられた字句であることがわかる。したがって、これらの箇所が忌避されていった事実は、上述したグノーシスのエッセンスの前提をなす〈天地の隔絶〉ないし〈此岸における神性の不在〉という思想に作曲家がしだいに共感を強めていったことの間接証拠と考えるべきであろう。

こうしてオリジナルの「クレド」は、シューベルト独自の神学に改鑄された。歌詞と作曲家の関係からこの事態を捉え返すならば、ドイツ語歌曲において歌詞の権威を作曲家が覆す「解釈的ドラマトゥルギー」（Kramer 1998）の契機は、ラテン語ミサ曲においても立ち上がっていると言える。